

紙つづて

若者の志は時代とともにある。まずは子どもの中に灯をともすことが大切だ。

第二次大戦終結の一九四五年に小学校に入った。疎開、焦土神戸の復興、そして食料の欠乏が脳裏に残る。

最初の憧れは湯川秀樹博士。四九年、日本初のノーベル賞受賞は小学五年だった私を鼓舞し、希望を与えてくれた。京都大で物理学を学びたい、と。

中学入学目前の春休み、化学技術者の父に連れられ、東洋レィヨン主催の製品発表会に出かけた。聴衆に子どもは私一人。「この画期的な人工繊維は石炭と水と空気から生まれる」。主題はナイロン。熱気あふれる講演が十二歳の心を打ち、この感動が物理学から化学の道へと導いた。

「産業界で良い製品をつくり

子どもの心に灯を のより 野依 りょうじ 良治

世の中の役に立ちたい」。日本初の合成繊維ビニロンの発明者櫻田一郎教授も所属する京都大工学部へ。五七年、ソ連の人工衛星スプートニクの成功が科学技術時代の到来を告げていた。わが国では石油化学工業興隆のころ。だが人生は計画通りにいかない。産業活動を夢みだが、恩師に諭されて、大学にとどまる。この判断は片道切符、名古屋大に転じ研究人生を歩むことになった。

起承転結の「転」は理化学研究所。二〇〇三年から自然科学の総合研究所の運営に携わる。生きがいだった研究は休業中だが、若き日の思い、科学者の人生の質は、社会への貢献いかんで決まると思っている。科学の可能性は無限。しかし、狭量な科学原理主義は排除すべきで、社会的価値の相対化が必要だ。

(理化学研究所理事長)